1973－74　新潟県方言辞典・・上越編・佐渡編（渡辺富美男・野島出版）
1977　岩波講座日本語11・方言（柴田式・徳川宗賢ほか編）
1980　方言談話資料(3)－青森・新潟・愛知（国立国語研究所資料集10－3・秀英出版）
1981　言葉・西と東（徳川宗賢・日本語の世界８・中央公論社）
1982－83　しなの方言考（上・下）（福沢武一・信濃毎日新聞社）
1984　国文学解釈と鑑賞５月臨時増刊号「新しい方言研究」（加藤正信編）
－？　心のふるさと　新潟弁かるた（山内恒平・新発田市豊町／旧五十公野村）

＊執筆にあたり、新発田市在住の父・竹端春人（1911年生れ・開業医）の資料提供と助言を得た。（TAKEBA　Ryôiti；本学教授）

愛媛；ゲツッポ・千葉・愛媛；ほかに、ゲク・ゲゲ・ゲス・ゲロなど；cf. アイヌ語はkes《おわり》、朝鮮語 kʔɯt〕

ショ⌉ッタレ《だらしない、なまけ者；見苦しい感じの人》〖ナ〗〔群馬・長野・和歌山・香川・土佐・山口・対馬；《不潔な人》新潟県上越；ショータレ・佐渡〕

セ⌈ヤミコキ《不精者、なまけ者》〖ナ〗≒ショッタレ・ノメシコキ

ダ⌉ラ《動作ののろい、ねむそうな感じの人》〔《ばか》加賀・福島・石川・岐阜県吉城郡・島根など〕

デ⌈レスケ（ヤロー）《にやけたような、ばかな人、おろか者》〕福島・関東；テレスケ熊本

ド⌈ントキ《間のぬけた人》〔《あほう者》越後出雲崎；トンテキ、トントケ、長野県下伊那郡；《おてんば》三河〕

ノ⌈メシコキ《不精者》〖ナ〗〔ノメシ・新潟・長野県下水内郡・群馬；新発田の学生語で学習参考書つまり虎の巻を**ノメシ**、**ウマノシタ**と言った。〕

＊動詞に接尾語**コキ**をつけたことばとしては、ほかに、**ウ⌈ソコキ**、**テ⌈ンポコキ**《うそつき》、**シャ⌈レコキ**、**マ⌈ネシコキ**などがある。

ブ⌉ス《無愛想な人》〔宮城・茨城・群馬・千葉県東葛飾郡・山梨〕

メッコマ⌉マ、**メ⌉ッコ**《なま煮えのご飯》〔石川．庄内・秋田・宮城・福島〕「ほんにハ⌉ヤ、～でテ⌈ンデ《全然》食わんな⌉ィわ」

参　考　文　献

1892　越佐方言集（田中勇吉・野島書店）

1937　越後方言考（小林存・1975国書刊行会覆刻）

1938　頸城方言集（渡辺慶一）

1949　日本語方言文法の研究（藤原与一・岩波書店）

1951　全国方言辞典（東条操・東京堂）

1954　標準語引分類方言辞典（同上）

1962　方言学（藤原与一・三省堂）

1964　二王子山麓民俗誌（佐久間惇一・学生書房；1948柳田国男識語）

1966　全国方言資料・Ⅰ－東北・北海道）金田一春彦・柴田武編・日本放送協会）

1968　北蒲原方言語源考（波多野襄児・雑誌・蒲原14所収）

1969　日本方言文法の世界（藤原与一・塙書房）

1974　国語アクセントの史的研究　原理と方法（金田一春彦・書房）

もよいものである。ただ、もともとバカということばが形容詞に近い意味をもち、バカナ・バカニという形式をとるので、ウスラバカもナをとる形容詞（形容動詞, *na*-adjective）に入れた。

§4でとりあげる名詞は、だいたい上のようなもので、大半は人物を批評することばとなる。なお、§3の語類と同じく連体形ナをつけることのできる名詞には、そのことを示すため、〖ナ〗という表示をそえる。

*　　*　　*

☆**アチチャン、アチサン**《よその人》〖子どもことば〗「それ～のものだすけ、ちょーさなィばいィ《いじらないほうがいい》」

☆**アカミドコ**《赤く肉の見えるキズ》

☆**アメタンチョー**《はげあたま》〔分類方言辞典にタンキョ・新潟とある。新発田方言でチョ・キョはよく交替する。〔kjo～kçjo～tʃo〕例：東京ト゛ーチョー・ト゛ーキョー、change（チェンジ；子どもの野球用語）キンジ〕

☆**アワ**《ゲームやあそびに正式に入れてもらえない幼児など》「おんじ《〔o(ⁿ)dzï〕弟、次三男》わ～だども、かたして《仲間に入れて》やっさ」

☆**イノスケ（ヤロー）**《まともに相手にしたくない（インチキな）人間》

イチガィコキ《がんこで我をとおす人》〖ナ〗、**イチガィ**〖ナ形〗「あのじさまイチガィ（コキ）で困ったもんだてば」〔《正直》富山・三重＜一概。浄瑠璃・八百屋お七「なんにも御存ない故に御贔屓が一がいな」〕

オトコバチ《おてんば》〔オトコワッパ・釜石・山形県東田川郡；オハチ・愛知県知多郡・淡路島・広島〕

☆**ガ（ッ）ツ**《くいしんぼう》〖ナ〗〔ga(t)tsü,-tsï〕〔ガチ・香川〕「こんげにふっとつ《たくさん》くーて、ほんに～タケテ！」

ガガナキ《すぐ泣く弱虫》、**カガナク**〖自動〗〔秋田・庄内・米沢；《ぐちをならべる》岩手・宮城〕

ガメッチョ《ごまかして取る者；ずるい人》**ガメル**〖他動〗〔《ぬすむ》東北・栃木・群馬；《われがちに取る》仙台・山口〕

☆**ガンド**《がんこ者》

キメッチョ《すぐすねて自分にとじこもる人》キメル〖自動〗〔山形・仙台・福島〕

*動詞に接尾語**ッチョ**がついたことばには、**マネッチョ・シャベッチョ（サベッチョ）**などがある。

ゲ（ッ）ツ、ゲッポ《びりっかす》〔ゲツ・千葉・岐阜県可児郡・名古屋・徳島

府与謝郡《しなやかでないこと》<義強(ぎごわ)。(1)《強情》「剛暴義こわでなさけないぞ」（史記抄）(2)《円滑でない》〕

☆**ジャシジャシ**《ご飯などに砂がまじって歯にあたる》〖副；～ナよりも～ノが普通。～スル、～ダの形でつかわれる。〗

ショーシ、オショ（ー）シ《はずかしい》〔<笑止。浄瑠璃難波丸金鶏；仙台・山形・長野・静岡・伊豆大島・千葉など；《くすぐったい》隠岐；《気の毒》江戸（仙台浜荻）・石川・香川など〕＊上越ではショーシイ〖形〗の形を用いる。下越でもショーシィを聞くこともあるが〖ナ形〗（形容動詞）の形が一般的。「オショーシでありますども、おひとつめしあがっておくんなさィや」「ゾーサものーて《おかまいもできず》ほんにショーシで…」ショーシガリ〖名〗ゾロビッコ《不ぞろいである》〔ゾソロビッコ・新潟県中魚沼郡；ゾロナ《不整頓な・不潔な》香川；ゾロッペー《だらしない》千葉・富山など〕「まえ髪切ってもろたどもになってしもたがね《しまったじゃないの》」

☆**ダメ．ダメ**《＝標。(1)してはいけない(2)うまくいかない；(1)の意味ではダメダ、(2)はどちらも》「ダーメだてば、そっつけことしたら」「おれダーメだわ、よーできなィが」

☆**チダラマッカ**《血だらけ》「～なわりに、あんま（し）きずはひどのて　いかったね」

☆**デッカナ**《＝標。大きい》〖連体詞〗、**デッカィ**〖形〗「そんな～手でチョーサレット《いじられると》やわかィもんだすけに、じーきボッコワレルねっか」

☆**ナンギ**《＝標。体や気分がつらい》〖名・ナ形〗「～して作った、あったらもん《貴重なもの》だれば、人にやれろばさー《やれるものか〔反語〕》」「あーィや、どしてだか、体がナーンギでたまんなィて」

ナマラハンジャク《中途はんぱ》〔群馬県碓米郡・福井・博多；標・ナマハンカ〕「あの人(しょ)はノメシコキ《なまけもの》だすけ、～なことばっか、してっろが《しているだろう》？」

☆**ヨーイ**《＝標。たやすい》「このぼっこれ車なおすのわ～なこんでなィど」

ヨッパラ《もうじゅうぶん；あきた》〖形動・副〗〔福島・関東・岐阜県揖斐郡・石川〕「やでもか《無理やり》酒飲まされて～になった」

§4．形容詞性のつよい名詞

まえの節では、助動詞ダの連体形ナがつくことをめやすに、無変化の体言型形容詞つまり形容動詞の語幹にあたることばをえらんだ。ただし、オオバラ・ガキガキ・ジャシジャシのような擬音語は副詞の性格もつよく、～ナとともに、～からノの形もある。ウスラバカは名詞として文の主語などの成分にもなり、本節にくり入れて

で　ありません

ほかの品詞にもなる体言型形容詞（いわゆる形容動詞）には〖ナ形〗という表示をそえる。
また、便宜上、アンゲナ・デッカナなどもここに合わせて記述し、〖連体詞〗とする。

*　　*　　*

☆**アッツケ（ナ）**《あんな》〔アンゲよりややらんぼうに聞こえる。〕「まーた～（な）こと言ーてー」「～（な）人となん付き合わなィほが　いィろねー《いいだろうね》」

ア（ン）ゲ（ナ）《あんな》〖ナ形；連体詞〗「～（な）ことばっか《ばかり》してっとミバワリど《ていさいわるいよ》」

☆この種類のことばには、ソンゲ・ソッツケ・**ソッツァ**／コンゲ・コッツケ・**コッツァ・コッチャバカ**《これぐらい》などがある。なお現在では、アンナ・ソンナ・コンナなどのほうが品がいいと思われる。

イトシゲ《かわいらしい》〔＝標。イトシイ長崎；《かわいそう》岐阜県吉城郡・鳥取・出雲〕「ほんに～なヤヤコ《あかちゃん》だてば」

ウ（ッ）スラバカ、ウッサバカ、ウッサー《ばか；変な考え方の人》〖名；ナ形〗〔関東。《ウスバカ》の意味では「バチモン」〕「おめさん（おまィさん）、ちょこっと～なこと言ーねっか」「なにをばしてんだ、～？とっとと《さっさと》来ィてば！」

オーバラ《ちらかりほうだい》「家の中～で、あがってもろーことも　できなィわ」

オカシゲ《変；ばかばかしい》「髪の毛が～になってっとも、なおしてやろかねす？」

ガ（ッ）キガキ《やせて骨ばっている》「そのおなごしょ《女の人》～ってて服もダファダファだったよ」

カワィソゲ《(1)かわいそう(2)かわいらしい》〔＜かはゆし。(1)史記抄「兄弟マテツミセラルルハカワイイ事ソ」今昔物語「この児に刀を突き立て（中略）殺さむは、なほかはゆし」；カアイラシイ《かわいそう》滋賀、カワイゲ・鳥取・出雲(2)カアイソーナ《かわいらしい》徳島県美馬郡」(1)「大きい子にかまわれて《いじめられて》～だこと」(2)「ばわれて《おぶわれて》眠って、ほんに～なヤヤコ《あかちゃん》だ」

ギゴワ《手足などの動きがなめらかでない》〔仙台・宮城・滋賀県伊香郡・京都

メグ（ッ）サ┐ィ・（ソ）《みっともない》〔<見（目？）くさい；東北・長野〕「へやじゅうオーバラ《乱雑》にしてて〜こと」

ヤバシ┐ィ・（シュ）《きたない、むさくるしい》〔福島・徳山；ヤバチイ《(1)じめじめする（仙台・岩手・福島）(2)きたない（青森・山形）》；俗語「ヤバ（矢場）い、ヤバな」は別のことば〕

ワル┐ィ・（ル）、ワリ《(1)わるい(2)恐縮だ、きまりわるい》〔(1)(2)＝標；《きまりわるい》の意味では奈良県吉野にも〕「ワルソゲに《きまりわるげに》言ってなったわ《おっしゃってましたよ》」

§3．体言型の形容詞——イトーシゲなど

橋本文法で形容動詞とされる体言型の形容詞nominative adjectives は、指定の助動詞ダと組になって、つぎのように用いられる。この種類の形容詞は語形変化をせず、もっぱら「だ」の変化によって文における役目をはたす。橋本文法（学校文法）では「だ」およびその変化形を「形容動詞活用語尾」とよぶが、本論では、体言型の形容詞と助動詞ダ・デス（古典語ではナリ・タリ・デア、ほかの方言でジャ・ヤなど）の組み合わせと考える。

(1)陳述形

1a	イ「トシゲ	だ┐／で┐す（＋ろ〔推量〕[17]）
1b		だ┐った／でした（＋ねし）

(2)接続形

2a	イ「トシゲ	に　（＋な┐る）
2b		で┐　（＋あります）
2c		だ┐ったり

(3)条件形

3a	イ「トシゲ	だ（れ）ば（＋いィさ）
3b		だ┐と／で┐すと（＋こまるが）
3c		だ┐ったら／で┐したら
3d		だ┐ったれば／で┐したれば

(4)連体形

4a	イ「トシゲ	な／だ（＋こと）

—　—

(5)打消形

5a	イ「トシゲ	で　な┐ィ（＋です）

(17) 中世・天草本平家物語「間違でこそあるらう」<らむ。

曇郡・和歌山・山口〕「いやーいや、きんな《昨日》の山登りはコーワィカッタてば《こわかったんだよ》」

サムィ〔samɯI、-mI、-mY〕・**（ム）**《寒い》「サームなってまいりましたことエす」

ショー（モ）ナ˥ィ・（ノ）《しかたがない、困った；つまらない》〔「性もない子供のいふ事」（妹背山婦女庭訓）・福井・大阪・徳島〕「ほんにショノ˥テ困った子どもだてば《子どもなんですよ》」

シワラクサ˥ィ・（ソ）《小便のにおいがただよう（ような）不潔な》〔シワリクサイ　山口県大島・愛媛県大三島〕

ソッパィナィ・（ノ）《(1)味気ない(2)そっけない》〔(1)佐渡・仙台・千葉(2)関東辺（・志不可起）・岐阜県恵那郡。「妹とそっぱいの無い酒を飲み」（川柳評万句合）〕「なんもお構いもしないで～ことですて」ゾーサモナィ・（ノ），

ゾーサモナ˥ィ《ごく簡単だ》〔史記抄「チャット水デモ飲ムホドニ造作モナイソ」・長野県上伊那郡《おかまいもしない》〕

☆**チッチャコ˥ィ・（コ）**《とても小さい》〔≒チッチャ˥ィ・（チョ）、東京；チッコィ庄内・岐阜県安八郡・京都〕

☆**ツッパラコ˥イ・（コ）**《皮膚などがこわばる》「風ん中をば歩(あ)いで来たすけ《ので》顔がツッパラコ˥なったわ」

トッペツモナ˥ィ・（ノ）《突拍子もない》〔仙台・茨城・出曇〕「わきたまから～こと言うすけに、たまーげた˥がね」

☆**ヌルマッコ˥ィ・（コ）**《ぬるい》「お茶がヌルマッコカッタラうもなィねっか《おいしくないじゃないか》」

ネグサ˥ィ・（ソ）；ネグサ˥ル〖自動〗《(1)くさったにおいがする(2)命がつきる(3)だらしがない　〔《くさる》北陸・中部・三重・奈良・滋賀。(2)浄瑠璃・浦島年代記「ねぐさって死に来たか」〕「あのしょ《人》はもーはやネグサク（ネグソ）なったみたィだ」

ハッコ˥ィ・（コ）、**シャッコィ**《ひやっこい・つめたい》〔庄内・宮城県玉造郡・秋田・岩手〕「雪玉ちょ˥ーして《いじって》指(よび)がハッコなったてば」

ハヤ˥ィ・（ヨ）《時刻が早い；速度がある》「くーろ《暗く》なんのがハーヨ˥なったね・ハヨ来《＝来(け)ィ・来(こ)い》や」

☆**ヒンド˥ィ・（ド）**、**ヒンデ**《ひどい》、**ヒンド**、**ヒンデ**〖連用形〗《ひどく、たいへんに》〔ヒット（市内加治）・ヒンロ（豊栄市）〕「晩(ばん)げなヒンド風吹いたった」

フケサム˥ィ・（ム）《ふるえが来る、悪感がする》〔cf.・フケサメのある人《病状や気分などのよく変ること》青森・秋田〕

イタマシ┐ィ・（シュ）《(1)かわいそうだ(2)おしい》〔(1)＝標。(2)秋田・福島〕「あ┌ったらもんだれば、イタマシュ┐テやられな┐ィわ《大事なものだから、もったいなくて、あげられないなあ》」

エラ┐ィ・（ロ）《＝標。(1)えらい(2)はなはだしい、大変だ〖副〗たいへん、とても(3)体がつらい》〔(2)大阪・会津・中国・九州(3)岩手・中部・中国・四国〕「雪エーラ┐ィつもったこって《つもったことだろうね》」「いやー┐や、足がエーロ┐テ歩かんのーなってば《歩けなくなったんだよ》

☆**オッキ┐ィ（キュ・キョ）**《＝標》「あんにゃま（＝上の坊ちゃん）もオーキョなんなった（＝なられた）ねし」　≒デッカィ

オッカナ┐ィ（ノ）《おそろしい＝標》「オッカなィすけ見てみなせや」

☆**オモシャ┐イ（ショ）**　おもしろい　「そっつけだ（＝そんな）ふうに言われっと、おらオモッショなィがね」

カガッポ┐ィ（ポ）《まぶしい》〔長野・佐渡・山；カガユイ佐渡；カカハユイ（物類称呼）濃尾

ガセーナ┐ィ（ノ）《ひよわだ、力がない》〔青森・静岡《力・元気》下伊那《物のかさ、大きさ》〕

カンジョ┐ワル┐ィ（ル）《つごうがわるい》〔＜勘定。＝仙台；《予定》秋田《予想・見つもり》東京《きまりがわるい》秋田仙北部

クッチャ┐ィ（チョ）《腹がいっぱいだ》〔クチイ庄内（浜荻）宮城・関東・長野；《きゅうくつだ》群馬県碓氷郡；クツイ《くるしい、だるい》愛媛〕「腹クッチョなった」

ケナル┐ィ・（ル）《うらやましい》、**ケナルガル**〖自動詞〗〔ケナリィ・ケナルィ秋田・関東・・伊豆大島・中国・四国・大分；《きまりがわるい》川越・狂言『鉢叩』「異なりうて」〕

ケ┌バサ　ワル┐ィ・（ル）《元気にないように見える》〔＜ケバサ《鳥の羽のつや》下伊那；ケバ・ケバケバ「草鞋のけばむしり」（歌舞伎『お染久松色読販』）

コチョバッタ┐ィ・（ト）《くすぐったい》、**コチョバス**〖他動詞〗〔新潟・山形；コチョバシイ新潟県淡島・長野県上田・石川、コソバタイ庄内（浜荻）〕「やめれや、～なィか（＝じゃないか）」

☆**コミットモナ┐ィ・（ノ）**《みっともない》「東京弁なんか話してハー～こてー（＝ことよ）」〔形容詞に接頭辞コをつけると、いっそう不愉快さがつけくわわる。例：☆**コギタナィ**《うすぎたない》☆**コッツァムシャイ**《さもしい、おそろしい》**コメンドクサィ**《いやだ、めんどうくさい》**コッパリアィナィ**《ちっとも張合いがない》〕

コワィ・コウェ〔kowε〕**・（ウォ）**《おそろしい；かたい》〔東北・長野県北安

ほかの地方のことばや標準語、古典語と共通の表現でも、1世代むかし、または現在の新発田の人が日常ごくひんぱんに用い、この地方の重要なことばになっているものもふくむ。

(イ) カタカナ書きの見出し語において、下線をほどこした拍は、強調などの感情をあらわす際に2、3倍長く発音される。ワリ˥ィ《わるい；すまない》というよりもワーリ˥ィ、ワーーリ˥ィというほうが相手やその状況に対する入れ込みが深まるのである。イントネーションとしては、ひくい調子、中ぐらい、高い調子およびさらに高い調子の4種ほどがみとめられる。

(ロ) 接続詞2a（連用形）は見出し語のあとにおわりの部分だけを( )に入れて示す。

(ハ) おおよその意味を《 》の中に示す。標準語とほぼ同じ意味の場合は《＝標》と表示。

(ニ) 形容動詞・副詞などとして用いられる単語には、それぞれ〖ナ形〗・〖副〗等の略語をそえる。

(ホ) ほかの方言における分布や古典語として用例などを〔 〕の中に示す。[16]

(ヘ) 新発田方言の例文は「 」に入れて示す。ただし、例文は、できるだけ方言の表現を多くもりこんだので、現在の日常表現より古い時期のものとなっている面もある。

(ト) 『全国方言辞典』『分類方言辞典』にない見出し語に☆印をつける。

*　　*　　*

アグラシ˥ィ・（シュ）《こうるさい；じゃまっけだ》

☆**アジカケナ˥ィ・（ノ）**《思ってもみない》～こと˥で人にワ˩ール言われたれ˥ば、お˥ら、せつーな˥ィね

☆**ア（ッ）ツ˥ィ・（ツ）,アッチェ˥・（チョ）**《＝標。熱い、暑い》「このお˩茶アッチョテ飲めな˥ィが」

☆**アバィカバィナラナ˥ィ**《かばいきれない》・（ノ）

アマゴィ〔 'amago , -ge̱ 〕《あまい味がする》「こ˩のナ˩シはアマーゴ˥テ、ほっぺ˥た落ちそだげだわ」

アンバィ˥ ワル˥ィ・（ル）《＝標。案配・具合がわるい》〔酒落本「頭痛がしまして、あんばいのわるさに」〕「～ことに˥雨降˥って来てしも˥て、て˥んで困った˥ったさ」

イ˥ィ・（ヨー）《よい》「こ˩ーせ˥ァ～さ《こうすればいいよ》」「あったこな˥ってイカッタねし《よかったですね》」

☆**イ˩ゲチ ワル˥ィ・（ル）**《胃の具合がわるくて口がまずい》

(16) 主として「全国方言辞典」「分類方言辞典」(どちらも東京堂）および「国語大辞典」（小学館）による。

言語地図の上でハヨー（　早く）やヨー（良く）が東西方言境界線の東にあるからといって、そこにアコー（赤く）やウレシュー（うれしく）などのウ音便があると思ってはいけない。ハヨーとヨーとは、語的な例外として、法則から離れて、独立に旅行してしまった語形である。[13]

牛山初男『東西方言の境界』（1969）[14]によれば「白う／白く」の境は、伊良湖岬－蒲郡－木曽山派から上越海岸近くにおり、越後平野を東へまがってゆく。すなわち中・下越方言の日本（海寄りは、このウ音便に関しては西日本）型に属するわけである。

ウ音便といっても、発音の上ではそれの前の音との関係でつぎのような語形になる。

／-a、-o／のあとで／-OR オー／

クラ˥ィ　kɯ(:)raɪ	クロ˥(ー)　kɯ(:)ro(:)
クロ˥ィ　kɯ(:)roɪ	クロ˥(ー)　kɯ(:)ro(:)
〔中越では kɯrɔ: および kɯro: 〕	
ハヤ˥ィ　ha(:)jaɪ	ハヨ˥(ー)　ha(:)jo(:)
イィ（＜よい）'I:	＊ヨ˥(ー)　jo(:)
オモ（ッ）シャイ	オモ（ッ）ショ（ー）'omoʃʃo(:)

／-i、-u／のあとで／-UR ウー／

フル˥ィ　Fɯ(:)rɯɪ	フ（ー）ル˥(ー)　Fɯ(:)rɯ(:)
イタマシィ　'ɪtamaʃi(:)	イタマシュ　'ɪtamaʃɯ(:)
オ（ー）ッキィ　'o:kki:	オ（ー）ッキュ／＊オ（ー）ッキョ 'o:kkjɯ／'o:kkjo
アッツィ　'attsïɪ　'attʃe	アッツ（ー）／＊アッチョ（ー） 'attsɯ̈／'attʃo
キッツィ　kittsɯ̈	キッツ（ー）　kittsɯ̈

＊印をつけた形は例外といえるが、部分的な／ユ～ヨ／の交替はこの方言の特色の一つでもある。[15] オユ／オヨ《お湯》・ユンベナ／ヨンベナ《昨夜》など。山形県米沢ではワルクテノー《わるくてね／ワール˥テネー》であり、会津はハヤェーグキテ《早く来て／ハヨー　キテ》という。岩手県江刺市もハヤグナル《早くなる／ハーヨ　ナル》で、東京方言とともにク活用をのこすけれども、越後の大部分ではk音の脱落と長音化（新発田ではみじかく発音することが多いので、( )入りにした）が起きた。

2.4.　形容詞――ソッパィナなど

標準語と共通のものはできるだけはぶき、下越／新発田独得（と土地の人に感じられる）の、いわゆる「俚語」に類するものを中心にえらんだ。県内はもちろん、

(13)「中部地方の方言の文法」(国文学解釈と鑑賞49－1，1984）P.78
(14)「図説日本語」(角川書店　1982）P.438参照
(15)　波多野嚢児「北蒲原方言語源考」(「蒲原」昭和43年夏号P.48）

3c　ハッケ⌉カッタラ（バ）　　アッチェ⌉カッタ⌉ラ（バ）
3d　ハッケ⌉カッタレバ　　アッチェカッタレバ

ハッケ〔hakke(:),ʃakke〕とアッチェ〔'attʃe(:)〕・アッチョ〔'attʃo(:)〕は本来のハッコィ・アッツィ・アッツゥでもいい。丁寧な完了形は「ハッケカッタデス、ハッコ　アリマシタ、ハッコィカッタネシ」など。

(4)　打消形

打消は接続形2a(未然形・連用形）に形容詞ナィ〔naɪ，nɛ〕をつけるだけで表わす。その丁寧な形は、終助詞ネシ〔nesï，nesü〕をそのあとにつづけるか、ナイデスまたはアリマセンを文末において表わす。

ハッコ⌉ナィ《つめたくない》
ハッコ⌉ナィカ⌉ッタ《つめたくなかった》
ハッコ⌉ナィバ《つめたくなければ》
ハッコ⌉ナィ（デス）ネ⌉シ
ハッコ⌉　アリマセン（ネ⌉シ）《つめたくございません（ね）》
ハッコ　ノ⌉ォテ《つめたくなくて》
ハッコ　ノ⌉ォ　ナル《つめたくなくなる》

ここで重要な役割をになう形容詞2倍の変化を示す。

(1)　陳述形〔未完了・完了の終止形〕
1a　ナ⌉ィ、ネ⌉ー　　イ⌉ィ〔'I:〕
1b　ナ⌉ィカッタ　　イ⌉カッタ（＜イィカッタ）
(2)　接続形〔連用形などにあたる〕
2a　ノ⌉ー〔no:〕　　ヨ⌉ー〔jo:〕
2b　ノ⌉ーテ、ナ⌉ィデ　　ヨ⌉ーテ
2c　ナ⌉ィカッタリ　　イ⌉カッタリ
(3)　条件形〔仮定形などにあたる〕
3a　ナ⌉ィバ　　イ⌉ィバ
3b　ナ⌉ィト　　イ⌉ィト
3c　ナ⌉ィカッタラ（バ）　　イ⌉カッタラ（バ）
3d　ナ⌉ィカッタレバ　　イ⌉カッタレバ

接続形2aについて都竹都年雄はつぎのような注意をあたえている。

定）・命令の6活用形を立て、ク・ク・シ・キ・ケレ・カレ（口語文法では、ク・ク・イ・イ・ケレ・o）という活用語尾をならべる。方言文法あるいは話しことばの文法では、これでは現実につかわれる表現の形から遠いので、発話の際にひとつづきに発音される語形を単位として示すほうが都合がよい。本論では、その単位を「単語」とよび、「活用」のかわりに「語形変化」conjugation とよぶ立場で形容詞のいろいろな表現形を示すこととする。

ためしに学校文法（実は江戸時代国学以来の伝統文法）の活用表に新発田のイ˥ィ《良い》・ナィ《無い》をあてはめてみると、つぎのような、わかりにくい結果となる。

語尾 / 語幹	未然	連用	終止	連体	仮定	命令
〔良〕 イ ヨ	ィカッ ォ	ォ	ィ	ィ	ィ	○
〔無〕 ナ ノ	ィカッ ォ	ォ	ィ	ィ	ィ	○

上の表の小文字ィ・ォは、いわゆる「語幹」とともに一音節に発音される音節末尾の母音〔-ェ; -:〕を示す。ヨ˥ーテ《よくて》・ノ˥ーナル《なく＋なる》等はときにみじかく発音されるし、イ˥(ィ)カッタネー《よかったね》もみじかいことが多い。ナ‿ィ〔naɪ〕はネ〔nɛ〕となることも多いから、活用表は空欄ばかりになる。つまり生きた方言の語形としては、上の表の「語幹＋語尾」全体（未然形の後半部分カッはのぞく）を語幹 stem とみるのがよい。[9]

ハッコ˥ィ《つめたい》・アッツィ《あつい》の語形変化（一部発音のゆれ省略）を示す。

(1) 陳述形（言いきる形）[10]

1a ハッコ˥ィ、ハッケ˥　　アッツ˥ィ、アッチェ˥

1b ハッケ˥カッタ　　アッチェ˥カッタ

(2) 接続形（つづく形）[11]

2a ハッコ˥(ォ)　　アッツ˥(ゥ)、アッチョ˥

2b ハッコ˥テ　　アッツ˥テ、アッチョ˥テ

2c ハッケ˥カッタリ　　アッチ˥ェカッタリ

(3) 条件形（条件の形）[12]

3a ハッケ˥バ　　アッチ˥ェバ

3b ハッケ˥ト　　アッチェ˥ト

(9) 柚倫「学校文法について」武蔵野女子大学紀要・3号，1967

(10)〜(12) 田丸卓郎「ローマ字文の研究」1920による分類

る。

2.2. 形容詞語尾複母音の発音

現在では新発田でもイ〔標準のｉ～方言のɪおよびï〕とエ〔標準のｅ～方言のe̞〕とを区別するのが一般的である。これら５種の母音〔ｉ、ɪ、ï、e̞、e、〕はたがい似ているので、しばしばヨーチイン《幼稚園》・ダイガクエン《大学院》のような混同がおこる。シ・ス、チ・ツにおいては〔ウü〕に近い母音〔イï〕があらわれるので、ピチイ《PTA》・イツゴ《越後》のような極端な混同も見受けられたが、いまは標準語の母音がゆきわたったと見るほうがよい。

形容詞は語尾に「イ」があってその前の母音複母音化あるいは単母音化する。本論では、さまざまな母音のゆれをカナ表記でいちいち写さず、小文字「ィ」によって形容詞語尾の複母音のおわりの「い」をあらわすことにする。実際の音価はつぎのように千差万別なので、文法記述のためには表記法をある程度一定にしておく必要がある。

語尾／-ai／　ソッパィナィ〔soppa͡ɪna͡ɪ , -pɛnɛ〕《あじけない》・コーワィ〔ko:wa͡ɪ ～ -wɛ〕《おそろしい》・ナ͡ィカッタ〔na͡ɪkatta , nɛ-〕《なかった》

語尾／-ii／　イィ〔'i: ,'ɪ(:)〕《よい》・オーッキ͡ィ〔'o:kk(ɕ)i(:)〕《大きい》・アグラシ͡ィ〔'agɯraʃi(:) , -sï(:)〕《わずらわしい》

語尾／-ui／　サーム͡ィ〔sa(:)mü͡ɪ , sa:mɪ , same̞〕《さむい》・ワール͡ィ〔wa(:)rü͡ɪ , -rɪ〕《わるい》・アッツ͡イ〔'a(t)tsïɪ , 'attʃe̞〕《あつい》

語尾／-oi／　ヒ（ン）ド͡ィ〔ɕi(n)do͡ɪ , ɕi(n)de̞〕《ひどい・たいへんだ》・トーコ͡ィ〔to:ko͡ɪ , -ke〕《遠い》

上の形容詞末尾の小文字の「ィ」は〔ｉ，ɪ（ｅにちかいイ），ï（sï , tsï などの母音で，üにちかい）〕になるか、あるいは、まったくe̞と同じに発音される。まえの母音といっしょになり複母音として一音節になることが多い。複母音化を示すために、ここでは〔ナ͡ィ na͡ɪ〕のように、くくる記号をつけたが、以下省略する。

2.3. 形容詞の語形変化——ウ音便活用

学校文法で形容詞の活用といえば、未然・連用・終止・連体・已然（口語では仮

1.5. 日本語の中の新発田方言

平家物語演習のおり、佐渡ご出身の佐々木八郎博士に「スンバダショかね。」となつかしがられたことがある。東北式の鼻音化現象のない佐渡やほかの越後各地から見ると、阿賀野川以北の方言はひじょうにザィゴクサィ（ゼゴクセ）ことばにひびくのであろう。新発田人自身はシバタショ〔 sïbataʃo, ʃibataʃo 〕と発音しているはずだが、新発田の内外でスンバタショ〔 sïᵐbadasjo, -ɕo 〕のような発音が聞かれるのも事実である。各方言の話し手たちはこうしてたがいに近隣の姉妹方言を耳ざとく聞きとがめ、からかいあっているが、そのどれもが独得・個有の言語なのではなく、日本語とよばれるラングが成立する過程でなんらかの役割をになった語彙・文法・音韻等を今日につたえる文化遺産なのである。

標準語と共通の表現は言うまでもないが、俚言とよばれる各地方「独得」の表現は、標準語では消えた古い形を保存していることが多い。（国語教育というものが、いたずらに地方の言語を「わるいことば」「まちがったことば」と否定して、国家統一のために国家語としての国語／標準語の普及・強制だけにつとめる過程はすぎた。今後は、もう一つの日本語大方言としての琉球語（沖縄県・鹿児島県奄美諸島）や日本国内の地方言語 les langues provincielles であるアイヌ語・ウイルタ語（旧称オロッコ語 —— 樺太・北海道）の継承・研究とともに、日本語諸方言に対する若い世代の理解と愛情をはぐくむ指導もおこなわれるべきである。

§2．新発田方言の形容詞

2,1. ショッタレは名詞か形容詞か

コザクやアンベ、あるいは「雪がゾケル《とけかけてザクザクになる》」のような動詞も雪国の感覚をうつしだす、おもしろさがあるけれども、つぎのおりにゆずる。本論では、形容詞、形容動詞およびショッタレ《だらしない人》のような形容詞性のつよい名詞をえらんで、つかい方、活用、発音等について考えたい。

学校文法でいう形容詞だけが adjectives ではない。形容動詞とよばれる体言型の形容詞と、連体形だけの無活用形容詞である連体詞ゾンゲナ・デッカナなども、ここにまとめて記述する。さきにあげたショーシも、上越では形容詞ウ音便活用が一般的らしいが、新発田では、どちらかと言えば、「オラ　ショーシダ」《わたし、はずかしい》のように形容動詞（筆者の考え方では形容詞性の体言に助動詞ダやデスがつづく形式）の活用が多い。イ語尾の形容詞とナのつく形容詞（〖ナ形〗とする）とのあいだは近い。この2種の形容詞と連体詞とよばれる形容詞（〖連〗）のあとに、ショッタレ《不精（な人）》やゲッツ《びり》など形容詞性のつよい名詞を若干とりあげる。名詞であるのに、連体形「～な」も自由につらなるものには、〖ナ〗の表示をそえる。この「～な」は、あきらかに助動詞ダの連体形とみなされ

オクスケニ	オグサゲ	おくから
キテ　クレヤ	キテ　クロ	来てちょうだい

(2)　下越と会津／勝常の比較

2－a)　磐越でことなる言い方

〔新発田〕	〔会　津〕	〔東　京〕
ハーヨ　キテクレ	ハヤェーグ　キテクロ	早く　来てくれ
ヤロト	ヤッチェト	やろうと
オモータドモ	オモッタケンヅモ	思ったけど
ヨカッタロネシ	ヨカンベシタ	よかったでしょう
ツカレタスケ	コワェカラ	つかれたから
フロニ　ハイロ	フロサ　ヘーンベ	ふろに　入ろう
ヤスミナサイヤ	ヤスマンショ	休みなさい
ヨメニ　イキナ（サ）ッタ	ヨメサ　イガ（ハ）ッタ	お嫁にいらっしゃった
イカナイデシモータ	イガネーシマッタダ	行かないでしまった

2－b)　磐越で共通の言い方

〔新発田〕	〔会　津〕	〔東　京〕
ナーシテ	ナーシテ	なぜ
アルカナイバ　ナンナイ	アルカネ　ナンネー	歩かなければならない
シンパイ シタッケガ	シンペシラッケガ	心配してたんだけど
ヤヤ　ブ（ー）テ	ヤヤ　ブッテ	赤ちゃん　おぶって

新発田とは飯豊山（いいでさん）をはさんだ反対側の米沢や阿賀野川と磐越西線によって連絡のある勝常とくらべるだけでは、下越と東北との比較としては、ものたりない。たとえばショーシイ《はずかしい》がはたして東北的な表現であるかどうか、もっとへだたった地方とくらべなければならない。『全国方言辞典』（東条操1951）によれば「おしょしい・しょーし・しょーしい」の形で仙台・千葉県君津・伊豆大島等にも分布しており、山形・福島でもつかわれるとしても、どちらかと言えば関東（東国）のことばであろう。

東北地方の南寄りの両県とくらべただけで下越方言の位置を云々することはできないのだが、拙論では、筆者自身の10代の故郷であり、現在も両親の住む新発田の言語生活をいわば内側から報告することに重点がおくので、さらに奥の東北と念入りに比較する作業は省略したい。

1.4. 諸方言が「日本語」を形成する

日本語 la langue japonaise とか国語といえば、東京方言をもとにする標準語（共通語）だけのことと錯覚をおこしがちであるが、実は日本語というラング（言語、言語体系）は当の東京地方の山の手や下町の方言をはじめとする全国の諸方言の総合体である。東京の標準語生活の中にも各地の方言要素が流れこみ、新潟の標準語による言語表現（言いかえるならば、 parole パロル）はごく自然に土地の方言が加わって、意思の伝達を補強する。浅い川だから歩いてわたって来い、と言うかわりに、方言で「コザィテ ケ゛（＝コィバ）イィサ。」と声をかける。もっと標準語に近づけて「コザイテ来ればいいよ。」とも。

さて、東日本の「日本語」を形成する諸方言の中で、下越／新発田方言は、東北方言そのものではないにしても、それとも親しい。となりの山形県米沢市三沢[7]および福島県会津の河沼郡湯川村勝常[8]と比較してみる。資料は日本放送協会編『全国方言資料１・東北・北海道編』（1966）による。

(1) 下越と羽前／米沢の比較

１－a）羽越でことなる言い方

〔新発田〕	〔米　沢〕	〔東　京〕
スッロー	スンベ	するだろう
スッカェシ	スンベカーシ	するでしょうかね
イコデ	エグンベサ	行こうよ
ドコニ	ドコサ	どこに
ナレナィカッタ	ナリカネヤッタ	なれなかった
ワールテネー	ワルクテノー	わるくしてねェ
ホーノシニキタ	ホンノーシサキタ	奉納しに来た
フットツ	タント	たくさん
アッタロネ	アロッケヤー	有っただろうね
ソ（ン）ゲニ	ソンゲニ	そんなに
ナィカッタゲダ	ネーヨダケ	なかったようだ
クーテ　ネロデ	クッテ　ネドーン	喰って　寝よう

１－b） 羽越で共通の言い方

〔新発田〕	〔米　沢〕	〔東　京〕
トシ　イッタ	トシ　エッタ	としとった
モンダスケ	モンダハケ	もんだから
イタロカ　ネシ？	エタロカ？	居る？
フロデモ　タテテ	フロデモ　タデデ	ふろでも　たてて

(7) 旧三沢村（米沢市内）1953年収録
(8) 旧勝常村（湯川村内）1953年収録

わりこむ》など羽越・磐越に共通のことばが多い。なお、ショーシ˥ィや命令形のオチレ《おりろ》などは、ひろく中越にも入っている東北型の例である。

ここで新発田方言と上越・中越方言との異同をすこし検討しよう。上越・中越の資料は「新潟県柏崎市大字折居字餅粮」（剣持隼一郎1980・国立国語研究所資料集10－3）[5]ほかを参考にした。上越は同資料集の中頸城郡吉川町など、中越は主として柏崎と長岡の方言をさす。

上　越	中　越	下　越
カウ kaɯ《買》	コァー　kɔ:	コ˩ー　ko:
カッタ　katta　《買》	コァータ kɔ:ta〔餅粮〕 カータ　ka:ta〔長岡〕	コ˩ータ　ko:ta
カシタ　《貸》	カイタ	カ˩シタ
シロ　《せよ》	シレ	セ˥(ー)
オッド　《降》	オリレ	オチ˥レ
ワスンタガダ　《忘》	ワスレタガンラ	ワスレタ˥ンダ
イカレル　《行》	エキナ（サ）ル	イキナ（サ）˥ル
ヨメル　《読》	ヨメレル	ヨメ˥ル
ヨンダコトガ　アッタ	ヨンダッタ	ヨ˥ンダッタ
ソーダネー	ッダノー	ン˩ダネー
ワカラナイ	ワカラン	ワカンナ‿ィ（～ネ）
オキナイ　《起》	オキナェ　'okinɛ:	オ˩キナィ　'okina‿i
キンタダロー　《切》	キレタロァー　-rɔ:	キ˥レタロ(ー)

剣持氏のカナ表記「コァー・ロァー」はオ段長音の母音〔ɔ:〕をあらわす。中越方言には、このほかに、ビンボーbimbo:、トージ to:dʒi《冬至》などの〔o：オー〕があって、トァージ tɔ:dʒi《当時》やボァー bɔ:《棒》と対立する。この／OR／：／ɔR／の対立は、16・17世紀のキリシタン版ローマ字資料『天草本平家物語』（1592）などで‘ô〔o:〕：ǒ〔ɔ:〕’の書きわけによって知られる音韻対立が保存されたものである。現在の中越では〔ɔ:〕のほうへまとまりつつあるという。[6] 新発田にはこの対立はない。「冬至」も「当時」もト˩ージ、ト˥ージである。

ワスレタガンラ《忘れたのだ》にみられるｒ～ｄの交替は中越の長岡市や下越でも西寄りの豊栄市（葛塚など）の特色である。「角のうどん屋でごちそうになろうよ　がカロノウロンヤレ　ゴッツォ　ナロレとなるのは、新発田の西どなりまでの現象で、新発田人が大いにおかしろがる発音である。

豊栄市や中越の準体助詞ガン《の・もの・こと》は佐渡の西部にも分布しているが、新発田はノ（no）・ン（N）を使う。

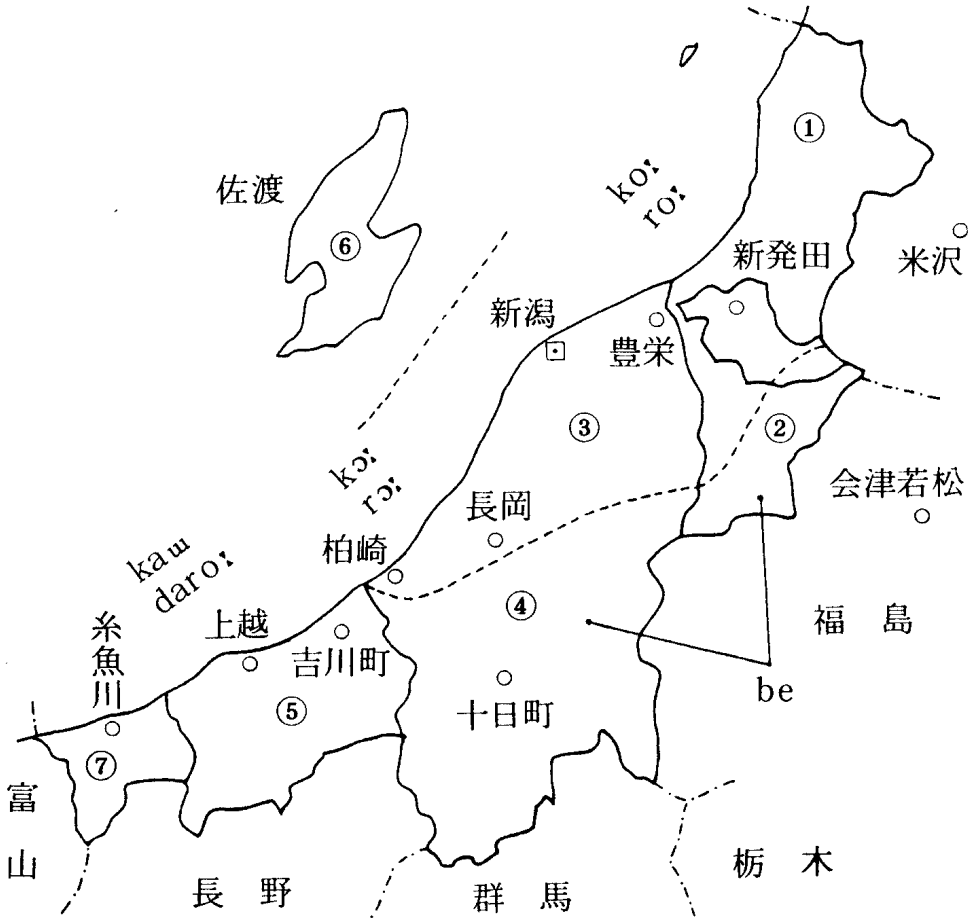
(5)「方言談話資料・3－青森・新潟・愛知」
(6)　剣持「餅粘」(前掲)　P.148

シロ˥・シーロ˥・シロ˥クとなる。ただし、本論ではアクセントについては、語例にアクセント核の位置を示す〔˥〕をつけるだけにとどめる。平板アクセントは、その語の第2モーラに〔˩〕をのせる。

1.3. 中越は／ô：ǒ／対立をのこすが

加藤正信[3]、剣持隼一郎[4]の指摘するとおり、東北・関東・中部の影響も比較的すくない日本海寄りの中越北部方言を代表的な越後方言とみなしてよいであろう。

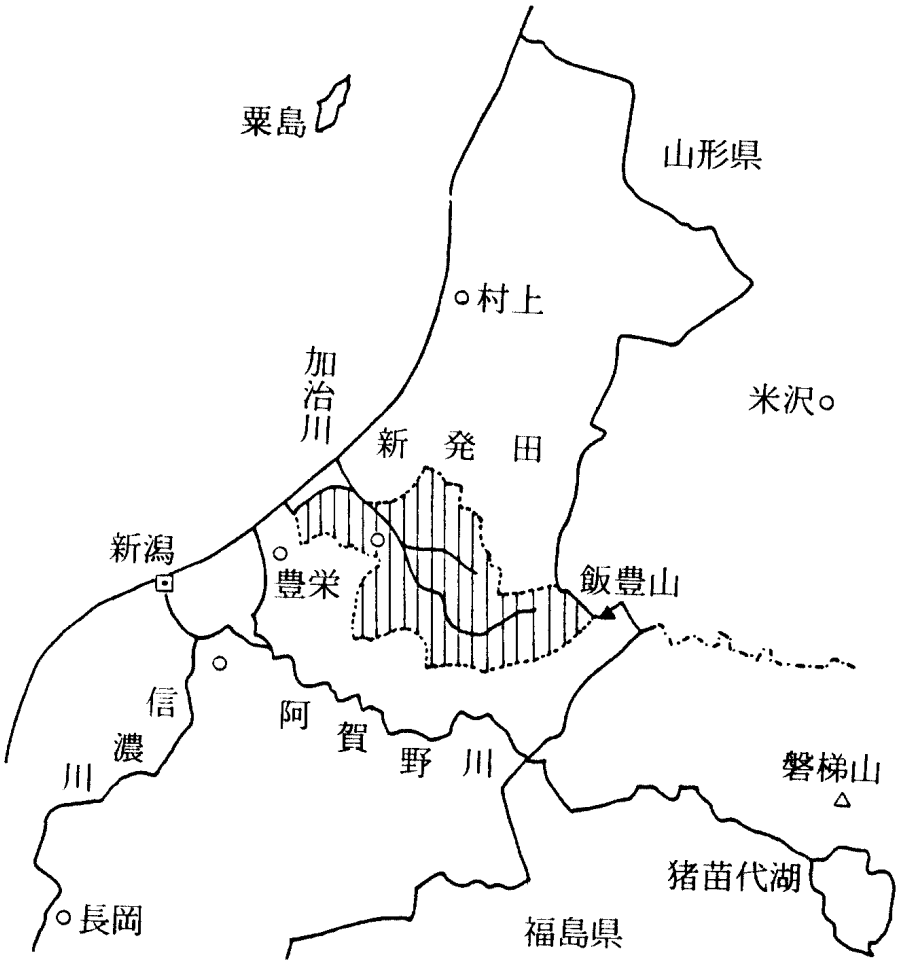
図2 新潟県方言区画略図〔①～⑦の区分は加藤正信氏による。〕



その点、下越のことばは、となりあう地方との往来もしげく、東北型の音韻傾向が目立つ。ジ・ズの区別がはっきりせず〔dzï ～ dzü〕のように発音する点や音声子音（濁音およびm・n音）のまえの鼻音化――マンズ〔ma^{n}dzü〕《まず》・ヒンデ〔hi^{n}de〕《ひどく》――などがそれである。ただし新発田旧市街では鼻音化しない。語彙の面でも、ヤ˥ヤ《あかんぼう》・シ˥ョーシ《はずかしい》・ネマ˥ル《す

(3)「方言学講座・2」「新潟県内方言区画図」による。
(4)「新潟県柏崎市大字餅粘」1980

図1　新潟県下越地方



ばれる城のあとには旧陸軍の連隊があって軍隊式の標準語や各地の方言が流れこみ、さらに疎開・引揚・復員等、住民の大移動も古い方言をよわめる原因となった。

その後、通学・通勤圏もひろがり、いっそう標準語に近い表現と発音が一般化して、若い世代は急速に方言語彙を失っていった。戦争すぐあとの時期に小・中・高校時代をすごした筆者としては、1960年前後に、6歳下の弟がすでにウ⌉ルメ《めだか》やガ⌉ィロッパ《おおばこ》ということばを知らないでいることにおどろいたものである。

それでも50歳代以上の人たちは、いまなお地方色のこい表現とイントネーションをたもち、いわゆる標準語で話す場においても、副詞や文末の形など、またアクセントの面に方言らしさをのこす。新発田方言のアクセントは、おおよそ東日本型だが、東京と異なる語も多い。ア⌈ジ《味》・アジ⌉《鯵》・マ⌉エ《前》・シロ⌉ィ（シーロ⌉ィ・シーレ⌉とも）《白い》などは東京方言と同じだが、アジ⌉サイ・ウ⌉シロ・ク⌉ツ・チ⌉チ《父》・ゲ⌉タなどではアクセント核の位置がちがう。東京のシ⌉ロク《白く》は

雪かがーっぽて　－1－

── 新発田方言の形容詞 ──

竹　端　瞭　一

新発田方言は越後北部のことばで、東北方言に近いが、中部や西日本とのつながりも強い。「雪をば　こざィて　あンべや」とよびかければ、飛騨の人にも通じるのではないだろうか。標題は《雪がまぶしくて　まぶしくて》という強調文だが、ここでも「かがっぽ」は西日本型のウ音便の連用形になっている。本稿では、ウ音便の形容詞のほか東日本式のダに先立つ形容動詞および形容詞性の強い名詞もとりあげる。

§1．東北・関東・北陸の交錯する下越

1.1.　新潟県新発田市

新潟県の佐渡方言は「京都語・大阪語とかなり異なるアクセント」（金田一春彦）[1]ながら京阪型に属する方言で、語形の面でも「行かん・行かなんだ」と活用する。越後側の諸方言もかなり関西・北陸の要素をふくみ、今はなき都竹通年雄氏[2]が北奥羽方言の南端とされた越後北部の下越方言でさえ「買ーたさか」（新発田では「～スケ」）の形があって、東北・関東の「買ったから」との境をなしている。

旧新発田〔 si(ᵐ)bàta 〕町は下越の岩船郡・北蒲原郡等のコメの集散地としてさかえた溝口10万石の城下町である。現在の新発田市は、加治川ぞいの菅谷・米倉・五十公野や越後山派を境に山形県と接する赤谷〔 'akatanï,'aka(ⁿ)danï 〕などの村を合わせた東西に長い地域である。人口こそ８万の小都市だが、岐阜の金華山から名古屋の熱田あたりまでにあたる大領域を占め、市の中心には下越一帯の人の出入が多い。市街地と農村部の両方から生徒がかよう1950年代の市立本丸中学校や各高校には、「そうなんだ」というのをソーインダ（新発田市中心）、ソーイッタ（加治）、ソイガンラ（豊栄市）など、さまざまに表現する生徒が集まっていた。(図１)

東の山地の赤谷は東北・関東の推量表現べー〔 (ᵐ)be: 〕を用い、平野部のロ〔ro〕（サムイロ《さむいだろう》・スッロ《するだろう》、ダーメダロ《だめだろう》など）といちじるしく異なる。

1.2.　新発田方言の現在

かって旧市街には士族ことばと町方ことばとが存在していたし、ザィゴ〔dzai̯(ŋ)go,dzɛ(ŋ)go〕とよばれた農村部のことばがあった。菖蒲城、狐の尾引き城とよ

(1)「国語アクセントの史的研究・原理と方法」（塙書房　1974）P.151
(2)　都竹通年雄（1919－1984)「日本語の方言区分けと新潟県方言）